

# 早稲田大学會津八一記念博物館所蔵甲骨文字考釈

長谷川 良 純

## はじめに

早稲田大学會津八一記念博物館所蔵の甲骨資料（以下、早大所蔵甲骨と称す）については、かつて松丸道雄（1959）により、実見調査の上、真偽判定・資料のナンバリング（1. 骨（會1.1）～25. 骨（會5.5））・模写が行われた<sup>（註1）</sup>。早大所蔵甲骨についての、まとまった学術調査・報告は、これが最初である。松丸道雄（1959）が調査した甲骨資料は、早大所蔵甲骨全量にあたる二十三片であり、報告によれば、そのうち無字骨（會4.1）が一片、偽刻（會5.1）が一片であったという。また、松丸道雄（1959：557）は、早大所蔵甲骨の由来についても、以下の通り言及している。

會津八一氏旧蔵のものであり、大正年間に購入といわれるが、詳細は明らかではない。しかし、本稿4（會1・4）は続5・18・8に見えているところから判断すると、羅振玉氏旧蔵のものであったと想像される。この片以外についても、既刊著録に収められているものがあるかも知れないが、未検討である。数片ずつ、五箱に収められている。

松丸道雄（1959）の報告は、文字考釈や本格的な断代を行うものではなかったが、同氏によるナンバリング・模写等は、未整理の考古学的資料を学術的に扱う上で、初歩的だが極めて重要なものであり、その成果は、島邦男編『殷墟卜辞綜類』（増訂版）（1971年刊行）に反映され<sup>（註2）</sup>、また、『甲骨文合集』（1979年－1982年刊行）及び『甲骨文合集補編』（1999年刊行）に、模写の大部分が採録された。

早大所蔵甲骨のまとまった文字考釈については、廬丁（1994）が実見調査に基づいて行ったのが最初であり<sup>（註3）</sup>、その後、『甲骨文合集補編』や『甲骨文合集釈文』（1999年刊行）に、松丸道雄・廬丁両氏の模写に基づく新たな釈文が掲載された。

筆者は、2017年11月30日から数回に渡り、幸いにも早大所蔵甲骨二十三片全てについて実見調査させていただく機会を得た。本稿では、松丸道雄・廬丁両氏の研究成果を参考にしながら、無字骨片及び松丸道雄（1959）が偽刻と判断した一片を除く全ての甲骨版について、改めて詳細な考釈を行う。考釈の順序は、松丸道雄（1959）の資料番号の順に依る。

## 甲骨文字考釈

### 1. 骨（會1.1）／AY-O-032／合 40787<sup>（註4）</sup>

分組分類（時期）：典賓類（第一期（武丁中期）－第二期（祖庚早期））<sup>（註5）</sup>

〈釈文〉

貞。乎（＝呼）𠄎眾。受又（＝祐）。<sup>（註6）</sup>

〈現代語訳〉

貞問する。𠄎（＝人名）を呼んで（某地に）<sup>およ</sup>眾ぶ。（神の）祐助を受ける。

〈考釈〉

先ず、この版の材質について、松丸道雄（1959）は骨版と見ているが、実際には甲版である。内容については、軍事行為に関するものである。この版については、殆ど同文の例が『甲骨文合集』に一件、

貞。乎（＝呼）<sup>およ</sup>𠄎眾（…）（合 2840、典賓類）<sup>（註7）</sup>

（貞問する。𠄎を呼んで（某地に）<sup>およ</sup>眾ぶ。）

とある。𠄎字は人名で、合 2840 とこの版にのみ見える。また、「乎…眾」の構造をとる例で言えば、『甲骨文合集』にもう一件、

勿乎（＝呼）宁壹眾。

（宁壹（＝人名）を呼んで（某地に）<sup>およ</sup>眾ぶことをしない。）（合 3508 反、賓組一類）

とある。ただし、「乎…眾」の構造の文に続けて、「受祐」と神の祐助の有無を問うことを附した例は他に見当たらない。しかし、軍事行為に関する貞問の例として類似の構造をなす文に、神の祐助を問う内容を附した例は他にもいくつかあり、例えば、『甲骨文合集』に、

貞。乎（＝呼）伐舌方。受<sup>𠄎</sup>（＝有）又（＝祐）。（合 6235、典賓類）

（貞問する。（某人を）呼んで舌方（＝地名）を伐つ。（神の）祐助を受ける。）

とある。

2. 甲（會1.2）／AY-O-033／合 40033

分組分類（時期）：典賓類（第一期（武丁中期）－第二期（祖庚早期））

〈釈文〉

貞。帝不我。其畀土方又（＝祐）。

〈現代語訳〉

貞問する。帝（＝神名。上帝を指す）は（殷王である）私に（神の祐助を授けない）。土方（＝殷の敵対勢力の汎称）に（神の）祐助<sup>あた</sup>を畀える。

〈考釈〉

ここでの我は、殷王の自称である。土方は、殷の敵対勢力の汎称である。「帝不我」という表現については、典賓類においてのみ見えるもので、『甲骨文合集』に、

…伐舌方。帝受（＝授）我又（＝祐）」（合 6273、典賓類）

（…舌方（＝地名）を伐つ。帝は私に（神の）祐助を授ける。）

…伐舌方。不受（＝授）我〔又（＝祐）〕。〕（合 6208、典賓類）

（…舌方を伐つ。私に（神の）祐助を授けない。）

という例があることからすれば、この版の「帝不我」は、「帝不受我又」の省略表現と考えられる。

なお、この版については、背面にも刻字が確認できるが、先行研究においてその報告がないため、本稿では、以下、（會1.2背）として釈読を試みる。

#### （會1.2背）

分組分類（時期）：典賓類（第一期（武丁中期）－第二期（祖庚早期））

#### 〈釈文〉

□入一。

#### 〈現代語訳〉

（某人が）一 納入した。

#### 〈考釈〉

2. 甲（會1.2）の背面に刻されている。甲骨版の貢納に関する記事刻字である。「入一」の「一」字は、某人が殷王朝に納入した、占卜に用いる甲骨版の数を表す。

### 3. 甲（會1.3）／AY-O-034／合 40980

分組分類（時期）：出組二類（第二期（祖庚期）－第三期（廩辛期））

#### 〈釈文〉

a. 丙子〔卜。〕旅貞。翌丁丑父丁舌。其𠄎牛（…）<sup>（註8）</sup>

b. 〔□□卜。〕旅…歳…𠄎…

#### 〈現代語訳〉

a. 丙子（の日）に卜う。旅（＝貞人名）が貞問する。翌丁丑（の日）に父丁（＝神名）に対して舌祭を行う。

𠄎牛を…

b. □□（の日）に卜う。旅（が貞問する。）…歳（＝祭名）…𠄎（＝祭名）…

#### 〈考釈〉

まず、この版の材質について、松丸道雄（1959）は甲版とみているが、実際には骨版である。旅は、貞人名である。舌は祭名で、磔（祭牲を裂く意）に釈される場合もあるが、祭義については判然としない。示に従う字形（＝祐）もある。『甲骨文合集』に、

丙子卜。旅貞。翌丁丑父丁舌。其又（＝祐）伐。 二月（合 22611、出組二類）

（丙子（の日）にトウ。旅が貞問する。翌丁丑（の日）に父丁に対して舌祭を行う。伐（=人牲）を脩める。

二月）

とあり、「丙～其」の部分が a と同じである。内容から言えば、二件は一連のもののように見えるが、実際には刻風にやや差が見られ、その可能性は低い。

𠂔字は、牛・馬・牝といった祭牲を表す語に附される形容詞である。勿に隸定され、物に釈されることが多いが、字義が判然としない。ただし、出組の例においては、専ら「𠂔牛」のように牛に附される形容詞として見える。

歳・𠂔については、ともに祭名である。

#### 4. 甲（會1.4）／AY-O-030／合 20418／続 5.18.8

分組分類（時期）：自組小字類（第一期（武丁早期－武丁晩期））

##### 〈釈文〉

□□ト。王貞。勿𠂔令人。自丙午至于庚戌曰方。其征。朕𠂔（=禦）。

##### 〈現代語訳〉

□□（の日）にトウ。王が貞問する。人に命令して（何らかのこと）をさせない。丙午（の日）より庚戌（の日）までに曰方（=地名）（が来る）。征（伐）する。（殷王である）私が（曰方を）禦ぐ。

##### 〈考釈〉

この版は、羅振玉『殷虚書契続編』5.18.8 に拓影が採録されている。勿𠂔は、二字で否定詞。殷代特有の語である。曰方は、殷の敵対勢力であり、この版の他に合 5756（自賓間A類）・合 6788（自賓間A類）・合 6791（自賓間A類）にも見える。朕は殷王の自称。

#### 5. 甲（會1.5）／AY-O-031／合 40602

分組分類（時期）：典賓類（第一期（武丁中期）－第二期（祖庚早期））

##### 〈釈文〉

- a. □亥ト。王。𠂔、𠂔（=療）十牛。
- b. 𠂔（=脩）十牛。
- c. 𠂔（=脩）五宰。
- d. 𠂔（=脩）百。 九月

##### 〈現代語訳〉

- a. □亥（の日）にトウ。王（が貞問する）。ある事柄を祈求する祭祀（=𠂔祭）を行うために、十（頭の）牛（を用いて）療祭を行う。
- b. 十（頭の）牛を脩める。

- c. 五（頭の）宰（＝祭牲の一種）を侑める。
- d. 百（の何か）を侑める。 九月

〈註釈〉

aの𣎵は、祭祀儀礼としてある事柄を祈求する意の動詞であり、基本的には「𣎵年（＝穀物の稔り）」「𣎵雨」のような形で目的語を取る他動詞だが、この版のように目的語を省略する場合も多い。燎は、祭牲を伴う祭祀儀礼の一種で、ある事柄を祈求する（＝𣎵）という目的を達成するために、𣎵祭の具体的な内容として記される例が多くある。

bの牛字については、松丸道雄（1959）が、牛字左半分に一画あるように模写している。「一牛」を表す合文の字画と見なしたのかもしれない。しかし、実見調査したところ、この一画は、他の字画の彫りと比べると浅いものであり、本稿では、字画ではなく字画上の傷であると判断した。

なお、bcdの各文については、まとめて一文として読むべきか判断しがたいところがあるため、別個の文として分けて読んでおくことにした。

6. 甲（會2.1）／AY-O-027／合 39799＝合補 13213

分組分類（時期）：典賓類（第一期（武丁中期）－第二期（祖庚早期））

〈釈文〉

壬申卜。𣎵貞。勿𣎵隹𣎵。

〈現代語訳〉

壬申（の日）に卜う。𣎵（＝貞人名）が貞問する。𣎵を…しない。

〈考釈〉

勿𣎵は、二字で否定詞。殷代特有の語である。𣎵は、罝字に𣎵される場合があるが、地名、或いは、地名に基づく人名であるため、原字形のままとしておいた。

7. 甲（會2.2）／AY-O-028／合 40992

分組分類（時期）：出組二類（第二期（祖庚期）－第三期（廩辛期））

〈釈文〉

a. …貞…東…𣎵（＝災）…一牛…匕（＝妣）壬。

b. 辛巳〔卜。〕□貞。王…往来… 在九月。

（兆序：一）<sup>（註9）</sup>

〈現代語訳〉

- a. …貞…東…災…一（頭の）牛…妣壬（＝神名）。
- b. 辛巳（の日に卜う。）□が貞問する。王が…往来… 九月のことであった。

〈考釈〉

内容については、a bともに王の往来に関するものであろう。ただし、欠損が多く、文意を把握し得ない。

8. 骨（會2.3）・9. 骨（會2.3背）／AY-O-029／合 4880＝合補 13179／鉄 84.2

分組分類（時期）：典賓類（第一期（武丁中期）－第二期（祖庚早期））

〈釈文〉

正：貞。勿卬（＝禦）賓于母庚。 七月

背：爭

〈現代語訳〉

正：貞問する。母庚（＝神名）に対して賓（＝人名）（の災厄）を禦ぐ祭祀（＝禦祭）を行わない。 七月

背：爭（＝人名）

〈考釈〉

正面は、『鉄雲蔵龜』84.2 に拓影が採録されている。禦は、祭祀儀礼として災厄を禦ぐ意の動詞である。賓は、人名。廣に釈される場合もあるが、個人名であるため、隸定するにとどめておくことにした。ここでは賓字の直後に災厄を表す語が省略されている。『甲骨文合集』に、

貞。賓不卬（＝死）。（合 17088、典賓類）

（貞問する。賓は死なない。）

という例があるが、このような災厄をふせぐ祭祀を行ったものとみられる。

背面の爭は、人名。賓組貞人として習見の爭と同一人物と見られる。ここでは殷王室への甲骨版の貢入に関する記事刻字中の署名として記されている。

10. 甲（會2.4）／AY-O-025／合 40485

分組分類（時期）：出組二類（第二期（祖庚期）－第三期（廩辛期））

〈釈文〉

丙午卜。貞。翌丁未召。其先效。 在十月。

（兆序：二 五）

〈現代語訳〉

丙午（の日）に卜う。貞問する。翌丁未（の日）に召祭を行う。先に改祭を行う。十月のことであった。

〈考釈〉

召・改は、ともに祭名であるが、祭義は判然としない。

11. 甲（會2.5）・12. 甲（會2.5背）／AY-O-026／合 40500

分組分類（時期）：典賓類（第一期（武丁中期）－第二期（祖庚早期））

〈釈文〉

正： a. 今日用五。

b. 翌日用五。

c. 妥𠄎

（兆序：一）

背：丙辰卜。

〈現代語訳〉

正： a. 今日五（つの何か）を用いる。

b. 翌日五（つの何か）を用いる。

c. 妥𠄎（＝人名）

背：丙辰（の日）に卜う。

〈考釈〉

a bの「用」字は、祭祀のために何かを用いるという意味であるが、何を用いるか数量以外は省略されている。

妥𠄎は人名。妥が地名で、𠄎が個人名と見るのが適当である。『甲骨文合集』に、

勿令妥南。（合 945 正、賓組一類）

（妥南に命令して（何らかのこと）をさせない。）

という例があり、「妥南」の語は、この版と同様に「地名＋個人名」の形を取っている。𠄎字については、他に同字形の例が見当たらないものの、『甲骨文合集』に一件のみ𠄎形の字が見られ、

…貞。王入𠄎…出。 若（＝諾）。 三月（合 5180 正、賓組一類）

（…貞問する。王が𠄎（という人物が治める地に）入る…出る。 承諾する。 三月

とある。合 5180 正では、𠄎一字で、その人物が治める地を表している。𠄎・𠄎字は、部分的に向きが異なっているが、時期的に言っても同一人物と見て差し支えなからう。

背面の刻字については、松丸道雄（1959）が模写しているが、その模写には辰字しかない。実見調査したところ、「丙辰卜」の三字が確認できた。なお、この版は、正反互足の関係をなすものと見られるが、欠損があるため、この三字が正面のどの文に繋がるものかは判然としない。

13. 骨（會3.1）／AY-O-018／合 40005

分組分類（時期）：典賓類（第一期（武丁中期）－第二期（祖庚早期））

〈釈文〉

允呂人勿于臺（＝地名）。

（兆序：七）

〈現代語訳〉

実際に人を率いて臺に行くことはしない。

〈考釈〉

臺字は、敦に釈することが多いが、ここでは地名として用いられており、隸定の字形のままとした。

14. 甲（會3.2）／AY-O-019／合 40219

分組分類（時期）：典賓類（第一期（武丁中期）－第二期（祖庚早期））

〈釈文〉

a. 今夕多雨。

（兆序：一）

b. …其… 十一月

c. (…)  
𠂔…

〈現代語訳〉

a. 今夜雨が多く降る。

b. …其… 十一月

c. (…)  
𠂔…

〈考釈〉

aの雨字については、先行研究にその字の存在が指摘されていない。しかし、原版を仔細に観察すると、雨字の字画が確認できる。『甲骨文合集』にも、

□□〔ト。〕韋貞。今夕多雨。（合12692、典賓類）

（□□（の日）にトう。韋（＝貞人名）が貞問する。今夜雨が多い。）

のように、同様の例がある。

cにおいては、𠂔の一字だけが確認できる。この字について、松丸道雄（1959）は模写していないが、廬丁（1994）がそれを行っている。ただし、字の前後は確認できない。



15. 骨（會2.3）／AY-O-016／合 39935

分組分類（時期）：典賓類（第一期（武丁中期）－第二期（祖庚早期））

〈釈文〉

- a. 己未卜。勿卒（＝執）缶。
- （兆序：三）
- b. □□卜。…缶。
- c. 雀亡咎。

〈現代語訳〉

- a. 己未（の日）にとう。缶（＝殷の敵対勢力）を捕らえない。
- b. □□（の日）にとう。…缶。
- c. 雀（＝人名）に災いがない。

〈考釈〉

缶は、殷の敵対勢力である。雀は、人名である。『甲骨文合集』に、  
雀弗其卒（＝執）缶。（合6875、賓組一類）  
（雀は缶を捕らえない。）

という例がある。この版と書きぶりにやや違いがあるものの、内容は同じであり、aの「卒缶」の主語は、雀であると見なしてよからう。

16. 甲（會3.4）・17. 甲（會3.4背）／AY-O-016／合 40602

分組分類（時期）：典賓類（第一期（武丁中期）－第二期（祖庚早期））

〈釈文〉

- 正： a. 癸酉卜。貞。旬亡𠂔。 不𠂔龜  
（兆序：二）  
b. …旬亡𠂔。 不𠂔龜  
背：羽

〈現代語訳〉

- 正： a. 癸酉（の日）にとう。貞問する。十日間災いがない。 不𠂔龜  
b. …十日間災いがない。 不𠂔龜  
背：羽

〈考釈〉

正面に見える旬字は、十日間を指す語である。𠂔は災いの意。癸の日に、翌甲の日より十日間における災いの有

無について貞問する卜辞である。「不~~レ~~龜」は兆辞の一種で、語義については定説がなく、判然としない。

背面は、貢納に関する記事刻辞であろうか。羽字は、貢納者の名の可能性がある。

18. 骨（會4.2）／AY-O-037／合40531

分組分類（時期）：典寶類（第一期（武丁中期）－第二期（祖庚早期））

〈釈文〉

- a. 甲午卜。王貞。翌乙未禴、衣（＝殷）。之日雨。乙充衣（＝殷）。
- b. …七羊…七歳。
- c. 庚…

〈現代語訳〉

- a. 甲午（の日）に卜う。王が貞問する。翌乙未（の日）にある事柄を祈求する祭祀（＝禴祭）を行うために、殷祭（＝盛大な祭祀）を行う。この日に雨が降った。乙（の日に）実際に殷祭を行った。
- b. …七（頭）の羊を…七（頭）の歳を…。
- c. 庚…

〈考釈〉

禴は、祭祀儀礼としてある事柄を祈求する意。衣は殷に積する。殷祭（＝盛大な祭祀）の意である。先に言及した5. 甲（會1.5）では、

- a. □亥卜。王。禴、寮（＝燎）十牛。

（□亥（の日）に卜う。王（が貞問する）。ある事柄を祈求する祭祀（＝禴祭）を行うために、十（頭の）牛（を用いて）燎祭を行う。）

のように、燎祭が禴祭の具体的な内容として記されているが、この版では、そのような具体的な祭祀の記述をせず、殷祭、即ち盛大な祭祀を行うという表現がとられている。

19. 甲（會4.3）／AY-O-036／合 40889

分組分類（時期）：典寶類（第一期（武丁中期）－第二期（祖庚早期））

〈釈文〉

- a. 丁未卜。貞。帚（＝婦）鼠。不其効（＝嘉）。四月（兆序：三）
- b. …〔帚（＝婦）〕鼠。効（＝嘉）。丁巳効（＝嘉）。
- c. …貞。東土其堇（＝嘆）。

〈現代語訳〉

- a. 丁未（の日）に卜う。貞問する。婦鼠（＝人名。武丁の配偶者）が出産する。男児を出産しない。 四月
- b. …婦鼠が出産する。男児を出産する。 丁巳（の日）に男児を出産した。
- c. …貞問する。東土は日照りする。

〈考釈〉

a に見える貞字は、字の上部の横画に彫り残しがある。婦鼠は、人名。武丁の配偶者である。  
婦鼠の出産に関する a b の文と天候に関する c の文は、同版上に見えるが内容的な関連はない。

20. 甲（會4.3）／AY-O-036／合 40085

分組分類（時期）：典賓類（第一期（武丁中期）－第二期（祖庚早期））

〈釈文〉

- a. 丁亥卜。商不其受年。 充。
  - b. 癸丑卜。商不其受年。 充。
- （兆序：二 二 二）

〈現代語訳〉

- a. 丁亥（の日）に卜う。商（＝地名）は（神より）穀物の稔りを受け取らない。 実際に（そうであった）。
- b. 癸丑（の日）に卜う。商は（神より）穀物の稔りを受け取らない。 実際に（そうであった）。

〈考釈〉

商は、地名。甲骨文に「大邑商」の語があり、殷の都であったとする説がある。年は、穀物の稔りの意。

21. 甲（會5.2）・22. 甲（會5.2背）／AY-O-036／合 39999

分組分類（時期）：典賓類（第一期（武丁中期）－第二期（祖庚早期））

〈釈文〉

- 正： a. …邑…  
b. 己亥…一…  
背：…貞。

〈現代語訳〉

- 正： a. …邑…  
b. 己亥（の日）に…一…  
背：…貞。

〈考釈〉

この版は、全体的に欠損が多く、文意を把握し得ない。正面 a の邑字にのみ填朱が施されており、b 及び背面の貞字は、邑字と180度反対向きに刻されている。甲骨文では、特に重要な事柄を刻す場合に、字に填朱が施されることがあり、邑字の部分は、b 及び背面の字が既に刻されたものを使い回して、改めて重要な内容を刻したものと見られる。背面の貞字の欠損も、使い回しの際に意図的に削られたことによる可能性がある。

23. 甲（會5.3）／AY-O-024／合 40832＝合 20075／佚 106

分組分類（時期）：自組小字類（第一期（武丁早期－武丁晩期））

〈釈文〉

己卯卜。王貞。鼓其取宋白（＝伯）丕、鼓囙。𠂔（＝簪）朕史（＝使）宋白（＝伯）丕匕（＝比）鼓。 二月

〈現代語訳〉

己卯（の日）に卜う。王が貞問する。鼓（＝地名）が宋伯丕（＝人名）（の地）を取ろうとすれば、鼓に災いがある。（殷王である）私の使者の宋伯丕を佐けて鼓を攻撃する。 二月

〈考釈〉

この版は、商承祚『殷契佚存』106 に、別の版と綴合された状態で、拓影と釈文が採録されている。本稿における釈文は、綴合されたものに従い、商承祚の釈文を参考にした。

鼓は、地名。宋伯丕は、人名。宋が地名、伯が爵称、丕が個人名である。ただし、ここでは、宋伯丕が治める地（＝宋）を指すものと見られる。𠂔字については、未だ定説がないが、本稿では、蔡哲茂（2007）が簪に釈し、佐・襄の意に解するのに従った。囙は災いの意。匕は、比に釈し、攻撃する意。

24. 甲（會5.4）／AY-O-021／合 40477

分組分類（時期）：典賓類（第一期（武丁中期）－第二期（祖庚早期））

〈釈文〉

…𠂔（＝禦）…𠂔三…𠂔五十。

〈現代語訳〉

…（災厄を）禦ぐ祭祀（＝禦祭）を行うために、三（頭の何らかの祭牲を用いて）𠂔祭を行い、五十（の何かを用いて）𠂔祭を行う。

〈考釈〉

禦は、祭祀儀礼として災厄を禦ぐ意の動詞であり、基本的には「王囙（王の災厄）」のような目的語を取る他動詞である。8. 骨（會2.3）のように目的語を省略する場合も多いが、この版は欠損が多く、目的語の有無を確認で

きない。𠄎・𠄎は、祭祀儀礼の一種で、災厄を禦ぐ（＝禦）という目的を達成するために、禦祭の具体的な内容として記される例が多くある。

## 25. 骨（會5.5）／AY-O-22／合 40320

分組分類（時期）：典賓類（第一期（武丁中期）－第二期（祖庚早期）

### 〈釈文〉

a. 丁未卜。宀。翌戊申啓。

（兆序：二）

b. □丑卜。…翌壬子…

（兆序：二）

### 〈現代語訳〉

a. 丁未（の日）にとう。宀（＝貞人名）（が貞問する）。翌戊申（の日）に晴れる。

b. □丑（の日）にとう。…翌壬子（の日）に…

### 〈考釈〉

内容は、a b どちらも天候に関するものであろう。文の構造について言えば、甲骨文中に同様の例が多く見られ、典型的なものであると言える。

### 註

- (1) 本稿で論じる早大所蔵甲骨は、松丸道雄（1959）の論文が発表された当時、現在の早稲田大学會津八一記念博物館の前身に当たる早稲田大学東洋美術陳列室（會津記念室）の所蔵であった。
- (2) 島邦男編『殷墟卜辞綜類』は、劉鶚『鉄雲藏龜』を嚆矢とする各甲骨著録の、初めての本格的な索引集である。初版は1967年11月に刊行されたが、松丸道雄（1959）の研究成果が反映されたのは、1971年7月刊行の増訂版においてである。
- (3) 盧丁（1994）による報告は、実見調査の上、松丸道雄（1959）によるナンバリングと模写のやり直し・文字の釈読・字形や語の特徴による断代・鑽鑿及び焼灼痕の有無について論じるものである。この報告においては、松丸道雄（1959）が偽刻として扱わなかった一片も本物として扱われている。盧丁（1994）が附した通し番号で言えば17（図17）がそれにあたる。ただ、この版については、筆者が実見調査したところ、字形が不正確で、文意も通らず、松丸道雄（1959）の見解に従って偽刻と見るのが適当だと考え、本稿では扱わないことにした。
- (4) 松丸道雄（1959）による資料番号（1. 骨（會1.1）～25. 骨（會5.5））・早稲田大学會津八一記念博物館の資料ID（AY-O-\*\*）・『甲骨文合集』『甲骨文合集補編』の資料番号を／で句切って示した。また、松丸道雄（1959）以前の著録に図版が採録されている場合、著録名と資料番号を適宜附した。
- (5) 分組分類の呼称と時期については、黄天樹（1991（簡体字版 2007））の見解を参考にした。
- (6) 本稿において、例文の命辞は疑問文としていない。命辞を疑問文とみるか否かという問題については、張玉金（2003：272-274）が、「對卜辞命辞是否問句的問題、學術界有三種看法：第一、有些學者認為卜辞命辞基本上都不是問句。…第二、有些學者則認為卜辞命辞有一部分是疑問句、而另一部分不是。…第三、有些學者、仍認為卜辞命辞基本上都是問句（卜辞の命辞が疑問文かどうかという問題については、學術界に三種の見方がある：第一、卜辞の命辞は基本的に皆疑問文ではないと考える学者がいる。…第二、卜辞の命辞には一部疑問文とそうでないものがあると考える学者がいる。…第三、卜辞の命辞は基本的に皆疑問文であるとする学者がいる）」と言う。張玉金（2003）は第三として挙げた立場をとっている。本稿の立場は、張玉金（2003）の言う第一のそれである。

- (7) 本稿で(…)とした部分は、字の欠損があるかどうか判然としないことを表す。
- (8) 同一版上に複数の文がある場合、各文頭にアルファベットを附した。ただし、これは、各文の先後関係を表すものではない。
- (9) 兆序は、占卜の回数に関する記録である。甲骨版上にこれが見られる場合、本稿では釈文の項目中に記した。

#### 参考文献

- 〔清〕劉鶚輯『鉄雲藏龜』（丹徒劉氏石印本 抱殘守缺齋所藏三代文字之一）、1903年（略号：鉄）  
羅振玉編『殷虛書契続編』（上虞羅振玉殷礼在斯堂影印本）、1933年（略号：続）  
商承祚編『殷契佚存』（金陵大学中国文化研究所叢刊 甲種）、金陵大学中国文化研究所、1933年（略号：佚）  
郭沫若主編・中国社会科学院歴史研究所編『甲骨文合集』（全13冊）、中華書局、1979-1982年（略号：合）  
中国社会科学院歴史研究所編『甲骨文合集補編』（全7冊）、語文出版社、1999年（略号：合補）  
胡厚宣主編・肖良琮等編『甲骨文合集材料来源表』（全3冊）、中国社会科学出版社、1999年  
胡厚宣主編『甲骨文合集积文』（全4冊）、中国社会科学出版社、1999年
- 松丸道雄（1959）「日本散見甲骨文字蒐彙（一）」 赤塚忠編『甲骨学』第7号（日本甲骨学会編『甲骨学』上卷、汲古書院、1972年）  
松丸道雄（1981）「日本蒐儲の殷墟出土甲骨について」 東京大学東洋文化研究所編『東洋文化研究所紀要』第86冊（東京大学東洋文化研究所創立四十周年記念論集-1-）  
松丸道雄（1988）「日本收藏的殷墟出土甲骨」（宋镇豪訳）『人文雑誌』1988年第4期（松丸道雄（1981）の中国語訳）  
黄天樹（1991（簡体字版 2007））『殷墟王卜辞的分类与断代（簡体字版）』、科学出版社、2007年（初版は（台北）台湾文津出版社、1991年）  
廬丁（1994）「早稲田大学東洋美術陳列室所蔵の甲骨文考釈」 早稲田大学美術史学会編『美術史研究』第32冊  
張玉金（2003）『20世紀甲骨語言学』、学林出版社  
蔡哲茂（2007）「积殷卜辞的𠄎（簪）字」『東華人文學報』2007年第10期

## 補足資料：會津八一コレクション甲骨（図版）

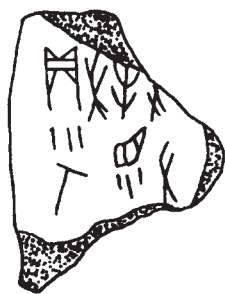
長谷川 良 純・徳 泉 さ ち

凡例：

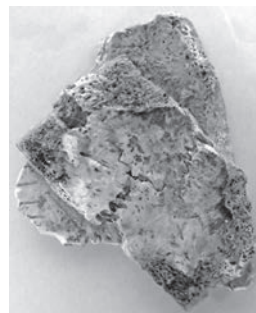
- 早稲田大学會津八一記念博物館所蔵甲骨（全23片）の正面及び背面の写真画像を、概ね原寸大で掲げる。刻字のある版については、長谷川が模写図を作成した。
- 各資料について、松丸道雄（1959）による資料番号と早稲田大学會津八一記念博物館の資料ID（AY-O-\*\*）をそれぞれ記した。
- 上記に続けて『甲骨文合集』『甲骨文合集補編』の資料番号を記し、松丸道雄（1959）の論文以前の著録に採録されるものについては、その資料番号も続けて記した。略号については、論文末尾の参考文献に対応する。

### 1. 骨（會 1.1） /AY-O-032/ 合 40787 <sup>（註1）</sup>

正

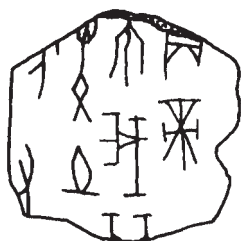


背

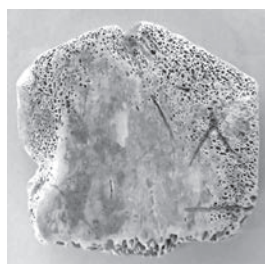


### 2. 甲（會1.2）・（會1.2背） /AY-O-033/合 40033 <sup>（註2）</sup>

正

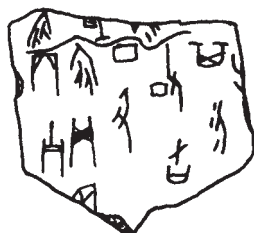


背

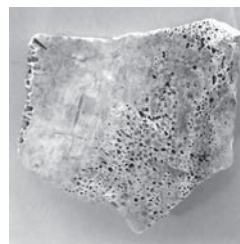


### 3. 甲（會1.3） /AY-O-034/合 40980 <sup>（註3）</sup>

正



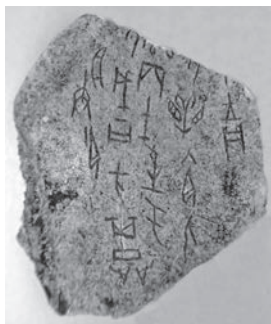
背



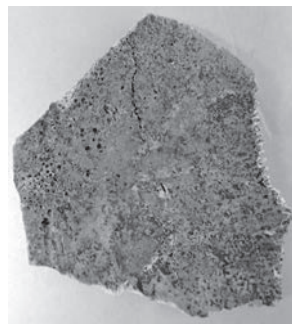


4. 甲(會1.4) /AY-O-030/合 20418/ 続 5.18.8

正



背

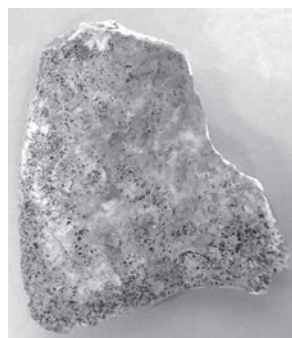


5. 甲(會1.5) /AY-O-031/合 40602

正



背

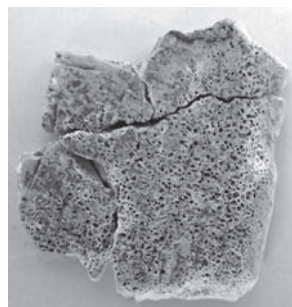


6. 甲(會2.1) /AY-O-027/合 39799=合補 13213

正



背

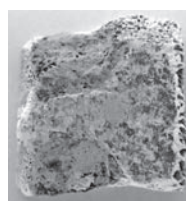


7. 甲(會2.2) /AY-O-028/合 40992

正



背



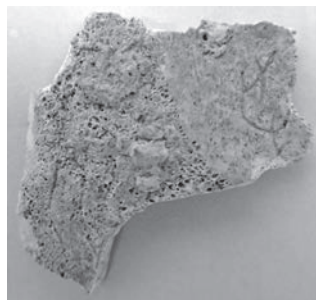


8. 骨（會2.3）・9骨（會2.3背）/AY-O-029/合 4880=合補 13179/鉄 84.2

正



背

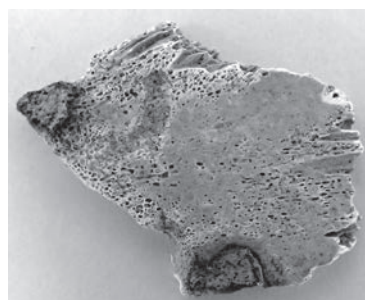


10. 甲（會2.4）/AY-O-025/合 40485

正



背

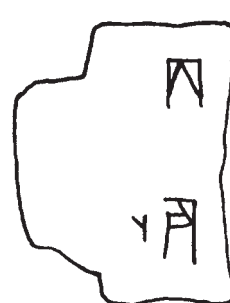
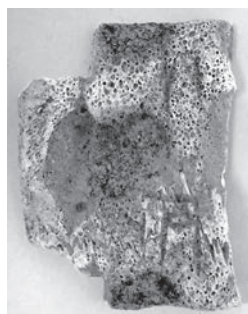


11. 甲（會2.5）・12甲（會2.5背）/AY-O-026/合 40500

正



背



13. 骨（會3.1）/AY-O-018/合 40005

正



背

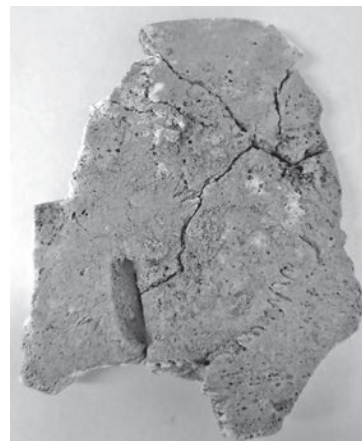


14. 甲（會3.2）/AY-O-019/合 40219

正



背



15. 骨（會2.3）/AY-O-016/合 39935

正



背

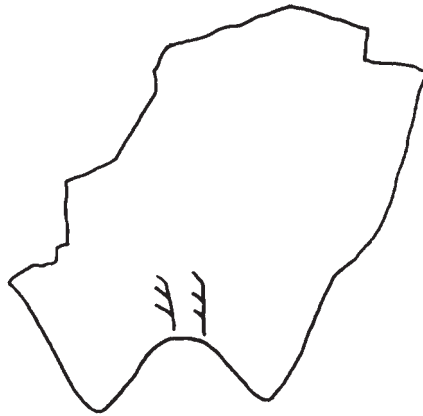
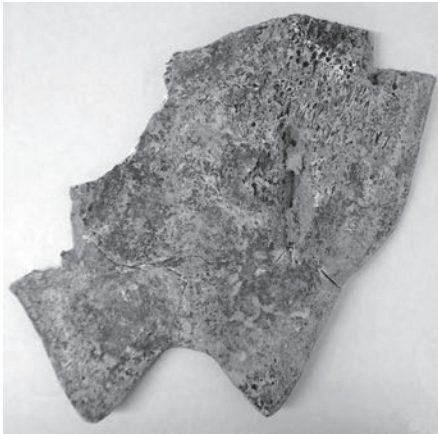


16. 甲（會3.4）・17. 甲（會3.4背）/AY-O-016/合 40602

正



背



無字骨（會4.1）/AY-O-035

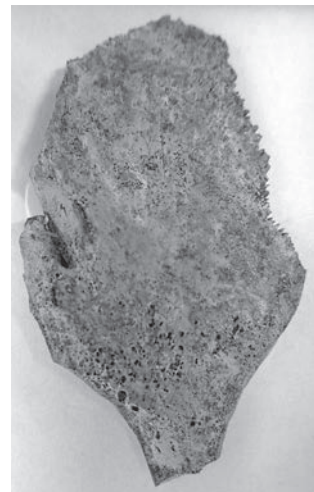


18. 骨（會4.2）/AY-O-037/合 40531

正



背





19. 甲（會4.3）/AY-O-036/合 40889

正



20. 甲（會4.3）/AY-O-036/合 40085

正

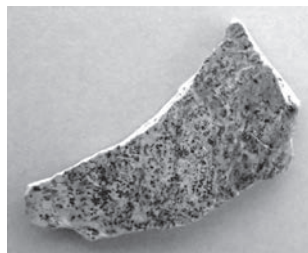


偽刻（會5.1）/AY-O-020

正

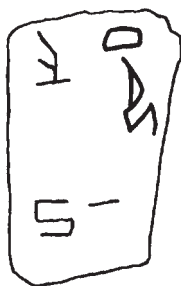


背

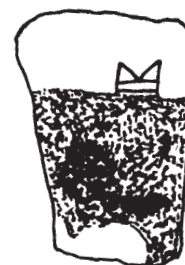


21. 甲（會5.2）・22. 甲（會5.2背）/AY-O-036/合 39999

正

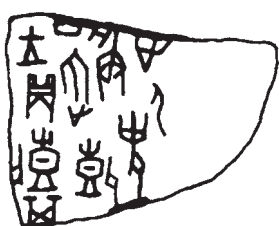


背

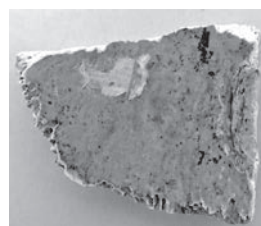


23. 甲（會5.3）/AY-O-024/合 40832・合 20075/佚 106

正

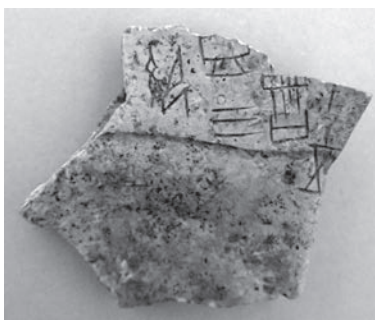


背

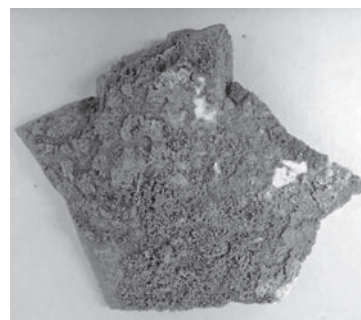


24. 甲（會5.4）/AY-O-021/合 40477

正

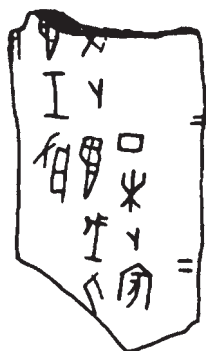
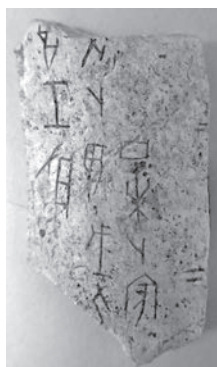


背



25. 骨（會5.5）/AY-O-022/合 40320

正



背



註

- (1) この版の材質について、松丸道雄（1959）は、骨版と見ているが、実際には甲版である。
- (2) 2. 甲（會1.2）については、背面にも刻字が確認できるが、先行研究においてその報告がないため、（會1.2背）として模写図を掲げる。
- (3) この版の材質について、松丸道雄（1959）は、甲版と見ているが、実際には骨版である。